

今回は、平井神社の宮座にかんする資料を紹介しま

す。平井神社の宮座(祭祀を執行するための組織)には、輪番の頭家(当家)の人たちによって書きつがれた『祇園午頭天王諸宮覚帳、宮中間中』という文書があります。

この文書には、長い間の村内外の出来事が継続して記録されています。江戸時代の記録は少なく、頭家の名前だけのものや、社殿修復、造営など宮座に關した記事のほか、享和二年(一八〇二年)の大洪水、天保七年(一八三六年)の大凶作それに続く、八年の大飢饉、嘉永五年(一八五

二年)の『富野村切大洪水』の記事などがみえます。

明治時代になると記事も多く、要件起云々』で始まる日清戦争の記事を始めとして、明治三十

『本年ハ我皇國開始以來無之大

和二十年(一九四五年)B29による爆撃で家屋が倒壊し、その後しまつのために村民

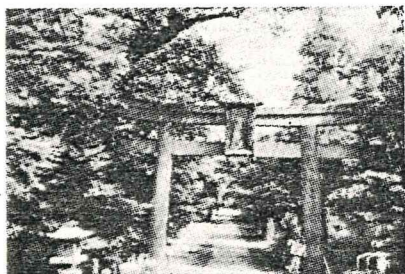
総がかりであたったことなどが記され、以下戦後も各年度ごとに記事が続いています。

以上のように、この文書

は、村内の状況はもとより全国の事件におよぶ社会史であり、それらをどう城陽の住民がうけとめていたかが知られ、民衆史の史料として興味ある文書であります。

をとりあげています。例えば、七年の日露戦争、明治四十二年から、現在まで絶えることなく書きつがれていること、大正十一年(一九二二年)の米騒動に關する記事、大正十二年(一九

市史の窓 No.25



書きつづけられ…270年

平井神社の 宮座文書

この文書が、元禄十五年